九州大学学術情報リポジトリ Kyushu University Institutional Repository

徳と技能について: ヒューバート・ドレイファスの 徳倫理学の可能性

丸山,望実九州大学大学院:博士後期課程

https://hdl.handle.net/2324/7392672

出版情報:哲学論文集. 61, pp.27-45, 2025-09-27. The Kyushu-daigaku Tetsugakukai

バージョン: 権利関係:

経験主義は、

には必要だと主張する。第二の立場が

「経験主義

(empiricism)」である。

経験主義者は、技能としての徳には知性主義が想

徳と技能について

ヒュー バート・ドレイファスの徳倫理学の可能性

丸 Щ 望 実

理学の中でも徳を技能とのアナロジーで理解する方針を採用する。マット・スティクターによると、技能の解釈の違いに基 本稿の目的は、 ヒューバート・ドレイファスに基づく徳倫理学を批判から擁護し、検討することである。 本稿では、

はじめに

づいた二つの立場がある。第一の立場が「知性主義(intellectualism)」と呼ばれる立場である。知性主義者は、 の徳を獲得し行使するためには、 個々の行為を導く普遍的な原理の把握が必要だと考え、このような知的な要素が技能や徳 技能として

定する原理のようなものは必要ないと考える。むしろ徳や技能の獲得には、 現代の技能に関する研究と整合的だという長所を持つ。この現代の研究として挙げられるものの 実際の試行錯誤が重要とされる。

<u>ニ</u>っ

・が、 ĸ

彼の技能論は魅力的ではあるものの、

イファスの研究である。ただしスティクターやマーク・クーケルバーグは、

— 27 —

関する概念である徳の説明として不十分な点があると批判する。

の議論によって、ドレイファスに基づく徳倫理学がなおも検討に値することを示すのが本稿の目的である。 レイファスに基づいた経験主義を擁護する、すなわちドレイファスの枠組みの内で批判には応答可能であることを示す。 この批判に対して本稿では、ドレイファスの技能の熟達段階をめぐる議論に注目して検討を行う。このことを通じて、

ドレイファスの他の研究に言及しつつ上記の問題点を説明することで、彼に基づく経験主義を再構成する。 究に基づく経験主義を検討する。そこでは、ドレイファスの研究を挙げた上で、彼に対する批判を確認する。 したがって本稿は、 以下のような構成である。第1節では、知性主義と経験主義を概観する。第2節では、 現代の技能研 第3節では、

1. 徳をめぐる知性主義と経験主義

ア・アナスらの議論に依拠しながら、 本節では知性主義と経験主義について、 徳や技能が持つ代表的な特徴を確認する。 スティクターによる先行研究に基づいて整理を行う。また、それに先立ちジュリ

1-1. 徳の持つ諸特徴

か」についての共通理解が存在しないためだと考える。そのため彼女は、この点を解決するために徳の本性をめぐる問いに

徳に関する研究は様々に関心を集めている。アナスはこのような徳理論の間にも対立が存在し、それは

答える必要があると考える。

アナロジーで理解されていたためだ。また、このような背景以外にも、 そしてこの点について彼女は、 徳と技能の類似点に着目するのが有効だと考える。 技能とのアナロジーは徳の持つ次のような特徴を捉 とりわけ古代において、 徳は技

ブレーキを適切に踏むという個々の行為ではなく、そのような技能を持つ運転手を称賛している。

えることができると考えられている。

すことはできない。 たがってある人物が気前のよさを備えるためには、 るに過ぎないかもしれない。 も不十分である。というのも、 例えば気前のよさという徳は、 したがって徳は、その人の特性として存続し行為と結びついていなければならない。 あるいは、 気前のよい行為をするだけならば「よい印象を与えたい」ために、いつもの態度を抑えてい 人に備わる特性とされる。また、その特性は一定の仕方で行為する傾向性をもたらす。 気前のよい感情を持つだけで行為を伴わなければ、その人を気前のよい人物とみな 単に気前のよい行為をするだけでも、またそのような感情を持つだけで

実践を通じて強まったり弱まったりする。このような習熟はまた、 は 「一定の状況において割れる」という傾向性を持つが、ガラスの傾向性は成長しない。 徳は成長するという特徴も持つ。この点から、徳がもたらす傾向性は単なる科学的なものと異なる。 技能と同様に、 誰かに教わることでより効果的になるこ 他方で徳という傾向性は 例えばガラス 様々な

たちは、 個々の有徳な行為を称賛するのではなく、そのように振舞う行為者本人を称賛している。 価値が認められているという特徴もある。すなわち、 私たちは徳や技能を有する人を称賛する。 この時私

とが期待される

を積むことで「緩やかに踏む」という行為を促すように変化しうる。すなわち「急に踏む」傾向性が弱まり「緩やかに踏む」 成する様々な行為を促す傾向性の一種である。 ことで効果的になる。そして私たちは、そのような技能を有することに価値を認め、 傾向性が強まっていく。 上記の点は技能にも当てはまる。 これは、 運転の技能の成長として捉えることができる。 例えば車の運転という技能は、それに関する行為を可能にする。 この傾向性は、 最初は「急に踏む」という行為を促していたが、 またこの成長は、 称賛する。またそこでは 同乗者に指摘され教わる この技能は、 アクセルや 運転を構

1-2. 知性主義について

と主張する。 うちの知性主義と呼ばれる立場について見ていく。スティクターによると知性主義は、 このように徳は技能と多くの共通点を持つことからも、技能とのアナロジーによる理解が試みられている。 徳と技能は次の三つの特徴を有する

- 1. 技能は教えることができなければならない
- 2 熟達者の技能に内在する(underlying)統一的な原理 (unifying principle) が存在する
- 3. 熟達者は、技能的な行為について説明ができなければならない

由来する。知性主義によると、熟達者になるためには、技能的振る舞いの背景にある理論を学ぶ必要があり、熟達者はその 第一の「技能は教えることができなければならない」という特徴は、 私たちは何かを学ぶことで熟達者になるという点に

理論を他の人にも教えることができなければならない。

要素を含むものであり、熟達者はこの要素を他者に教えることができなければならない。 であり、 この特徴づけは、ソクラテスによるコツ(knack)と技能の対比に由来する。コツは、単にやってみることで得られるもの 技能の持つ理論といった知的な構成要素を欠く。知性主義によると、 真なる技能とはコツとは異なって知的な構成

の領域に関する統一された把握」が必要となる。そしてこの主張は、 統 一的な原理の存在」という特徴は、 この知的な構成要素の存在と関連する。 特定の技能に関する領域を統一する原理が存在すると 知性主義によると、 技能には

この特徴は、 技能を持つためには一部のことができるだけでは足りないという点を反映している。 というのも技能を持つ

いうことを含意しており、

熟達者はこのような原理を把握している。

人は、 は、そこでどれだけうまく運転できたとしても技能を持つとはみなされない。 初めての状況でも適切に行為できなければならないためだ。 技能を持つと認められる。そして知性主義は、 初めての状況で適切に行為するためには、それを可能にする統 例えば、 教習所の中だけでしか運転をしたことがない人 私たちは見知らぬ土地でも適切に運転できて 的

な原理が必要だと考える。

ていなければならないと知性主義は考える。 自身の行為の理由を明示的に示すことができなければならない。またその説明は、 性主義は、 第三の「熟達者は説明ができなければならない」という特徴もまた、 技能を有する熟達者に対して、自身の行為や判断を明確に説明し、正当化することを求める。すなわち熟達者は、 技能に含まれる知的な構成要素に基づく。 技能の学習の際に習得した原理を反映し この時知

また熟達者はそのような原理に訴えることで、行為を正当化できなければならない。 習されているのは、 このように知性主義は、技能が学習され、またそれを伝えることができなければならないと考えている。そしてそこで学 関連する諸々の行為を可能とする統一的な原理であり、その原理は技能を構成する知的な要素となる。

1-3. 経験主義について

ターは、 能はコツと異なる。というのも、 知性主義は技能の獲得のために、 知性主義と対立する経験主義的な見方の存在を指摘する。 コツを可能にする単なる経験はそのような要素を含まないためだ。これに対してスティ 様々な状況で用いうる普遍的な統 彼はアリストテレスをこの見方の代表とみなす。 的原理の把握が必要だと主張する。 したがって、技

学習するだけでなく、 と時間が必要となる。 アリストテレスは 実際に家を建てることによって熟達した大工になることができる。私たちはこのような実際の活動な 徳は習慣づけによって獲得されると主張する。この習慣は、 そして彼は、 技能もまた行為の積み重ねによって獲得されると主張する。 行為の繰り返しによって獲得され 例えば大工は 一定の規則

スティクターは指摘する。 技能を習得することはできない。 この習慣と経験の重要性をアリストテレスは、 徳と技能に共通すると考えていたと

は、 たがって彼の議論はまた、徳や技能が統一された原理の把握に基づくという説明と一致しない。これらの点から彼の徳理解 かなりえないと考えている。そのため技能の習得には普遍的な原理の把握ではなく、試行錯誤を伴う経験が必要である。し そしてこのような習慣や経験の重要性を指摘する際、アリストテレスは、 知性主義と対立するとみなされる。このように経験主義は、 知性主義が必要と考える原理の存在を否定し、 徳や技能的な行為の記述は、 大まかなものにし

する根拠の一つに、彼女が古代の議論を重視しすぎるあまり、現代の技能をめぐる研究に十分目を向けていないというもの ることを通じた経験によってこそ技能は獲得されると主張する。 的な原理の把握が不可欠であると考えていた。経験主義は原理は必要なく、 そして経験主義は、現代の技能をめぐる研究によっても支持される。クーケルバーグがアナスの知性主義的な立場を批判 徳を技能とのアナロジーで理解する立場は、 2 現代の経験主義 知性主義と経験主義に分かれる。 試行錯誤や経験が重要であると主張する 知性主義は、 技能の獲得や行使において統 試行錯誤す

がある。クーケルバーグはいくつかの研究に言及するが、本稿では特にドレイファスの研究に注目する。

イファスの技能に関する洞察は優れているが、徳とのアナロジーとしては不十分な点があると指摘する。

本節ではドレイファ

しかし彼らは

クーケルバーグと同様にドレイファスに注目しつつ経験主義を検討している。

徳倫理学に適用するにあたってどのような批判が存在するか確認する

スの技能論を確認し、

またスティクターは

て行為をしている

う意図を形成しブレーキを踏む必要がある。この時初心者は、実際に身体を動かすのに先立つ意識的な熟慮や意図に基づい ブの際は安全のためにスピードを落とせ」という一般的な原理にしたがってどうすべきか熟慮し「ブレーキを踏もう」とい

11

た一般的な原理は不要となる。

2-1. ドレイファスの技能論

為者は成功状態に到達しようと努めるのではなく、ただ最適な均衡に向かって引き寄せられるだけでよい」と述べる。 最適なラケットの構え方や腕の振り方を現実化する必要があり、テニスの技能とはそのような振る舞いを現実化する傾向性 体は最適なゲシュタルトからの逸脱の感覚を引き下げるようにして動くよう導かれていると主張する。ただし行為者は、 られるのは、 前にこの最適さがどのようなものかを知ることはない。例えばテニスの技能を有する人は、試合中ボールを打ち返す際に、 「○○度でラケットを構えよう」といった意図や心的表象を抱いていることはない。彼はこのとき「没入的対処において、行 ドレイファスは技能の行使を「没入的対処(absorbed coping)」と呼ぶ。技能の行使である没入的対処の典型例として考え したがって初心者と熟達者は次の点で異なる。運転の初心者は「自分が今カーブに差し掛かっている」ことを認知し「カー ドレイファスによると、この時の行為者はただその場の感覚にしたがって身体を動かしているのであり、 テニスの試合中にボールを打ち返すことや車の運転などがある。 ドレイファスはこのような行為において、 前もって

クセルの調整を行う。 達した運転手は、 意図に基づいて身体をコントロールする必要はない。熟達者は、 それに対して熟達者は、 カーブに差し掛かれば、 したがって熟達者の行為の最中には、 次のように技能的に振る舞う。熟達者は自らの振る舞いに注意を払ったり、 その道路や運転している自身のスピードの感覚に応じて非意識的にブレーキやア 初心者の行為を導いていた熟慮や意図、またそこで用いられて ただその状況の感覚に応答して端的に行為をしている。熟 原理を用いた熟慮や

2-2.先行研究における批判

ないのではないかという問題点が指摘されている。 しかしドレイファスは、 ドレイファスに基づく経験主義には問題があると考える。それは彼の技能論が、 例えば、 有徳な人は実際に善い行為をするが、 技能にかかわる知的な構成要素の存在を否定するため、そのような説明ができ 私たちはその人に対して、 行為の理由を明確化し説明す 徳の重要な側面を見逃

批判する。この時彼は、 道具が車の運転を手助けするのと同様に、他者との会話や熟慮もまた、 ルバーグは、 同様の点は、 他者との会話や抽象的な原理は、 クーケルバーグによっても指摘されている。彼はドレイファスが、 ドレイファスが技能にかかわりうる熟慮をすべて否定するのは誤りだと考えている。そしてクーケ 技能的な振る舞いを手助けすると指摘する。すなわち、 徳の発揮となる振る舞いを手助けすると彼は指摘す 行為の社会的な文脈を踏まえていないと 標識といった様々な

る

信念は、 な信念や原理を発言することを通じた対話が必要になるためだ。 的な意思決定を必要とする。また、 レイファスのように個人の経験やノウハウだけで説明されるべきではないと指摘される。また彼が技能から排除する熟慮や 対話や熟慮の重要性は、 共同体とのかかわりにおいて重要ではないかと指摘される。というのも共同体を維持するためには、 道徳の問題で特に重要となる。例えば私たちは社会的な問題に直面した際に、 何が有徳な振る舞いとみなされるかは、 共同体と深い関係にある。 したがって徳は、 対話を通じた共同 実際に命題的 ド

すなわち私たちは、 し今回検討している徳に関する行為には説明の要求が高い。 たのちに「そうするのがいいように感じたためだ」と理由を述べたとしても、 これらの問題点は、 そのような状況では明確な説明を求める。そしてそのためには、 ドレイファスの技能論を徳倫理学に応用する際に生じる。 特に、 道徳的な衝突が生じている際にはその要求が高くなる。 ゲームに勝利している限り不満はない。 例えばチェスの熟達者が、 ドレイファスの技能理解では不十分だ ある一手を指し

持つ原理や意図が重要になる。

と指摘される

このような原理が関わる可能性を全て否定してしまっているように思える。この主張は行き過ぎであり、 にする知的な要素が必要ではないかと批判される。 応用する際には不十分な点があると批判されている。というのも、 て重要であるためだ。すなわち、 以上のように経験主義は、 現代の技能をめぐる研究によっても支持される。 確かに徳や技能にとって知性主義者が想定する一般的な原理は不要だが、 行為の説明や他者との対話を可能にする要素は徳にとっ しかしながら、ドレイファスの技能論を徳に 説明や対話を可能 ドレイファスは

3. ドレイファスに基づく経験主義

る際に原理を用いた熟慮や信念が必要になるが、彼はその点を考慮に入れていないと批判される。 要とするときがあるが、彼のモデルには正当化のための知的な要素が欠けているというものがある。第二に他者と対話をす ドレイファスに基づく経験主義には、 次のような批判があった。 第一に行為には理由を提示することを通じた正当化を必 また原理は技能にとって

本節では批判にドレイファスの枠組みから応答することで、彼に基づく経験主義を擁護する。

有用であり、その存在をすべて否定すべきでないと批判される。

3-1. ドレイファスの技能の熟達モデル

本節では批判に応答するために、ドレイファスは初心者が実践を積むことで技能に習熟していくと考えていた点に注目す また彼は倫理的な熟達を、 他の技能の熟達と同じように説明できると考えている。そして熟達の途中段階では、 主体の

原理を思い浮かべ意図を形成する必要はなく、その場の感覚に導かれているというのが彼の技能論であった。

例外的なルールを獲得していく。 ためにも「遊びに行った友達の家から帰るときは、実際はそうでなかったとしても「楽しかった」と言いなさい」といった る。その後子供は、 ていない子供を、 ドレイファスは同様のことが、道徳の熟達にも当てはまると考える。彼はある文化で道徳的に善く行為する仕方に精通し 道徳的な行為の初心者とみなす。そして子供はまず「嘘をつくな」といった、一般的な原理を学び行為す 様々に実践を積む。そうすることで例えば、単に嘘をつかないだけでなく、トラブルに巻き込まれない

よるとこの複雑な状況にスムーズに対処するためには、抽象的で一般的な原理では間に合わない。 スは、このような状況が様々にあること、またそこには数えきれないほどの関連する情報が存在することを指摘する。 このようにして子供は、嘘をつくべきではない状況がある一方で、嘘が必要な状況もあることを学ぶ。そしてドレイファ

重要だが、実践を積んで熟達者に達したのち、それらは必要なくなると考えていた。 実さの徳の獲得とみなされる。このようにドレイファスは、初心者にとっては原理や意図といった一般的で抽象的な要素が そのため熟達者の段階に達した子供は、原理に訴えることなく状況に応じて真実を語ったり嘘をついたりする。

キを引けば減速する」という原理やそれに基づく「減速するためにサイドブレーキを引こう」という意図にしたがって行為 | | 故障状態」に陥ったときである。 しかしドレイファスによると、 熟達者も原理を用いた熟慮を通じて意図を形成することがある。 例えば運転手は、ブレーキが故障した際に「フットブレーキが利かないならサイドブレー それは、 熟達者の行為が

なお熟達者の行為は、このような原理と意図に基づく行為によって故障状態を脱した後には、

再び非意識

する必要がある。

いに直面した際にも起こる。

的なものとなる。

当の気持ちは隠して「楽しかった」と言おう」という意図にしたがって行為する。 家から帰るときは、実際はそうでなかったとしても「楽しかった」と言いなさい」という原理を思い出し、それに基づき「本 をつかない」仕方で行為をしているときに、 技能の行使を妨げる故障状態は、 徳に基づく行為の場面にも起こる。いつも通りの仕方で行為しているとき、 相手が傷ついた表情をしているとする。この時行為者は「遊びに行った友達の

ある。 方に戻るためには原理や意図が必要になる。 心者の原理を用いた熟慮と熟慮を通じて形成した意図によって導かれる意識的な行為の仕方が切り替わると考えている点に そして、 イファスの行為論の特徴は、熟達者の技能的な没入的対処という感覚によって導かれる非意識的な行為の仕方と、 非意識的な仕方から意識的な仕方に移るきっかけの一つが故障状態であり、意識的な仕方から非意識的な仕 初

段階や故障状態など様々なものが含まれる。これらに再注目することで、批判に応答を試みる。 スティクターらは、 熟達した後の振る舞いに関するドレイファスの議論にのみ注目している。 しかし彼の議論には

3-2. ドレイファスに基づいた経験主義

ブルが発生した時だけでなく、 熟達者は故障状態において原理に訴える必要があるというドレイファスの考えから主張できる。 第2節で確認した批判に応答していく。第一に、 行為の中断を余儀なくさせるような状況、 行為には正当化が必要だというものがあった。 例えば「なぜそのようにしたんですか?」という 故障状態は道具にトラ この正当化

自分が置かれている状況を説明し、そこで採用していた原理を提示することで、 スティクターが 求めていた行為の正当化は、 この「なぜ?」という問いに答えることを意味している。 自身の振る舞いを正当化できる。 そして行為者は

- 38 -

化は単なる説明では不十分だというのが、道徳的な行為の特徴だろう。すなわち「なぜ嘘をついたのか?」という問 いつに損をさせたかったからだ」と答えるのは、 振る舞いを理解可能にしている。しかしこの理由では、 行為は道徳的に受

け入れ可能なものとして正当化されない。

提示することができる。したがってそのような道徳的熟達者の提示する応答は、その文化の中で受け入れられた、 為を正当化するものとみなされる とを重要視していた点である。そして熟達者であれば、初心者のころに学んだ道徳的原理を「なぜ?」という問いに応じて ここで注目すべき点は、ドレイファスが子供が道徳的に熟達していく際に、 所属する文化の中で学び実践を積んでいくこ 道徳的行

ができる。そして改めて実践を積むことで、 今まで採用してきた原理が間違っていたと考えるのなら、初心者の頃に立ち返り、新たな原理を意識しつつ行為をすること 舞いを手助けすると考えられていたが、この点は故障状態に陥ってしまった際の回復の手立てとして踏まえることができる。 や現在の状況についての理解を再認識しそれを提示することで可能となる。また、このような対話や熟慮は、 の仕方で答えることができる。すなわち他者との対話は行為を中断することで、自分が初心者のころから採用していた原理 第二にクーケルバーグは、他者との対話の可能性と有用性をドレイファスが捉えていないと指摘していた。この点も同 そして他者との対話は、熟達者にとって自身が採用している原理の見直しを試みるきっかけにもなる。このとき熟達者が、 再び行為者は熟達者としてスムーズに行為するようになる。このようにして私 技能的な振る

3-3. 知性主義との違い

たちは、熟達者になった後もさらに向上を続けることができる。

できる。 以上のように先行研究における批判は、 最後に、 ドレイファスに基づいた経験主義と知性主義を比較することを通じて、彼の技能論に基づいた経験主義を ドレイファスの初心者から熟達者に至るまでの原理や意図に注目することで応答 し彼は、そう考えないのではないか。

明確付する

主張する。

できることがあった。そしてこの時の教育や正当化は、第二の特徴である原理を示すことによって可能となると知性主義は 2で確認したように、 徳や技能には統一的な原理が存在すること。 知性主義は徳と技能が三つの特徴を持つと主張する。第一に、 第三に、 行為者は理由を示すことで行為を説明 他者に教えることができるもの

らを提示することで、技能的な振る舞いをする熟達者であっても理由を明示的に示すことができる とができる。 ドレイファスはこれら三つの点をどう考えるのか。第三の特徴については、 すなわち、 行為の中断を伴うのであれば、熟達者は行為の際に採用している原理や意図を明示化できる。これ 批判に応答した時と同様の仕方で説明するこ

見すると、 である。知性主義者はこれまでの二つの特徴と関連付けつつ、このような原理の存在を主張する。そしてドレイファスは ている初心者が熟達者と呼ばれる段階に至るためには、経験主義者が強調していた試行錯誤が必要不可欠である したがって知性主義とドレイファスが対立するのは、第二の技能に内在する統一的な原理の存在を認めるか否かという点 知性主義による第一と第三の特徴づけを認めることから、 統一 的な原理の存在を認めるようにも思われる。

ち熟達者は、このような原理を他者に伝え、またそれを用いた実践を促すことで初心者を教育できる。ただしそこで学習し

第一の特徴である他者に教えることができるという点も説明可能とする。

このように原理を明示化できることは、

という問いに答えることができると主張する。 知性主義者であれば技能的行為の最中も、 というのも、 しかしドレイファスは、このような意図の形成はあくまで行為が中断したのちに初めて行われると考える。 第一と第三の特徴を認める際に本稿では、 非明 それに対してドレイファスは、このような問いに応答する際に、 示的に意図や原理がはたらいており、 故障状態においてアクセス可能になる原理や意図の重要性を指摘 だからこそ私たちはいつでも「なぜ?_ 行為の中断 すなわち、

すなわ

を必然的に伴うという点に注意を促す。 .理が行為の最中に存在すると没入的対処を妨げるためだと考える。したがって、没入的対処の最中には知性主義が主張し 彼はこの中断を伴うことではじめて意図や原理を意識できるという特徴は、

た原理は存在しない。

ドを落とせ」という原理に沿っているからこそ、適切な技能的振る舞いとなっている。したがって確かに、 例えば「カーブに差し掛かったらブレーキを踏んでスピードを落とす」という振る舞いは「カーブに差し掛かったらスピー き寄せられていればよい。しかしこの時の振る舞いは、もともとの原理に沿っているからこそ「適切だ」とみなされている。 かに熟達した後の行為者はその最中に原理を思い出し意図を形成する必要はなく、自らの行為が「適切だ」という感覚に引 階において、 しかしこの、 それは行為の正当化に役立たないと反論できるかもしれない。この点に対しては、 行為者は一般的な原理を用いた熟慮に基づいて行為をしているという点から補うことができる。すなわち、 行為の最中に原理が存在しないという主張は、 意図や原理の理解はあくまで事後的に形成されるに過ぎない 技能に熟達していく途中の段 技能的振る舞い

な没入的対処にとってこそ、一般的な原理は不要だと考える。というのも、私たちが日常で出会う個々の具体的な状況には、 知性主義が原理の存在を主張するのは、技能を有する人は、 レイファスもこのような臨機応変な応答が技能に必要だと考える。 初めての状況でも適切に振舞うことができると考えていたた しかしながら、彼はむしろこのような臨機応変

には原理が介入しておらず、行為者のその場の感覚によって導かれているが、それは初心者のころに原理にしたがって振舞

う際に身に着けた感覚であるために、この原理を技能的な振る舞いの正当化の根拠として提示できる。

様々な要素が関連しうるためである 車を運転する際には、 周りの車の位置や道路、 自分の車の状況等を踏まえて適切に車を前に進めなければならな

ドレイファスによると、これらの臨機応変かつスピーディーな行為の際には、 また、 道路上でスムーズに運転するためには、これらの判断に基づく行為はスピーディーに達成され そのたびごとに一般的な原理を思い浮かべ熟

存在しない。

慮し、意図を形成していては間に合わない。

ろ、 報は膨大であり、 するとしていたが、そのような原理は個々の詳細な特徴を見逃すことになるために不適切だとドレイファスは指摘する。 とが困難だという問題点もある。 イファス技能論によると、普遍的な原理がそこで役立つという想定は間違っている。というのも、 示化し尽くすことはもはや不可能だと考えられる。したがって知性主義者は、 なことがマナーとされているかといった複雑な「雰囲気」や「常識」への応答が必要になる。こういった側面を記述し、 このように、 道徳的な振る舞いに重要となる非明示的な「雰囲気」への応答を困難にしてしまう。 特に文化と深くかかわる道徳的振る舞いの特徴的であるが、 技能を持つ人は様々な状況で適切に振舞わなければならないという知性主義者の主張は正しい。 それらを統一する原理を想定するのは困難であるためだ。またこのような抽象的な原理に従うことはむし 適切な仕方で他人にあえて嘘をつく際には、 行為の際に注目すべき情報を命題的に記述し尽くすこ 個々の技能的振る舞いを統一する原理が存 周りの人との人間関係やその社会でどのよう 個々の状況に含まれる情 しかしド

原理を意識することなく行為する能力を獲得する。それは没入的対処と呼ばれ、 のスピーディーな応答である。この行為には、知性主義者が技能や徳にとって必要なものとみなしていた一般的な原理は 以上よりドレイファスによると、初心者の学習や教育には一般的で抽象的な原理が必要になる。しかし私たちはその後. 個々の状況に含まれる明示化不可能な要素

うのが、 伝達によって行われていると主張していた点と対立する。すなわちこのような応答は、 とりわけ 非意識的に振舞う熟達者の段階に達して初めて可能となっている。このように原理を離れて振舞うことができるとい ドレイファスの特徴であり、 「雰囲気」への応答は、 明示的な原理として記述することはできない。 経験主義の一つとみなす根拠となる。 これは、 原理に基づいて行為していた初心者 知性主義が学習と教育が原理

が可能であると主張した。したがって本稿の議論が成功しているならば、彼の技能論に基づいた経験主義的な徳倫理学をさ 採用する際にいくつか課題があると指摘されている。本稿ではこれらの課題について、ドレイファスの枠組みの内でも説明 本稿では、徳を技能とのアナロジーで理解する立場を検討してきた。先行研究では、ドレイファスの技能論を徳倫理学に

らに検討していくことには意義があるといえる。

えばアナスは、有徳な行為に伴う「快さ」という情動や幸福をめぐる論点も重要視している。これらの点についてさらにド レイファスの枠組みから検討することで、経験主義的な彼の徳倫理学をさらに深堀していくことができるだろう。『 する立場が経験主義で良いのかという点は、今後さらに検討を行う必要がある。また、徳には様々な特徴を帰属しうる。例 性に注目しながら「知的な構成要素が必要か」という観点からのみ検討してきた。そのため、本当に徳を理解する際に採用 しかし本稿では、ドレイファスに基づいた経験主義を擁護するというのを第一の目標としていたため、教育や熟達の重要

註

- (1) アナス 2019、3頁
- 2)アナス 2019、第2音
- າ) Stichter 2007, pp. 184–186
- (4)この特徴は、現代の徳倫理学者の一部と対立するとアナスも認める。例えばジョン・マクダウェルは、有徳な行為は「一般化不

可能な原理」に基づくと考える。したがって知性主義的な定義は、 らこの第三の特徴づけは、あくまでプラトンやソクラテスにも連なる「技能が知的な構成要素を含む」という点から派生するも のであり、知性主義の否定には至らないとアナスは考える。 現代の徳倫理学者全員が同意するものではない。

- (5) Stichter 2007, p. 190
- (©) Coekelbergh 2019, p. 281
- Dreyfus 2001, p. 147Dreyfus 2001, p. 148
- (๑) Dreyfus 2001, p. 148
- (10)Dreyfus 1991, 「日本語版への序文」、19 24頁
- (11) Dreyfus 1991, 「日本語版への序文」、23頁
- (22) Stichter 2007, p. 193, 194
- (3) Coekelbergh 2019, ch. 4(4) Dreyfus 1990
- (15) Dreyfus 1991, 「日本語版への序文」、

19

24 頁

- (15) Dreyfus 2007, p. 363
- ドレイファスはこのような各行為を支える明示化不可能な理解を「背景理解 (background understanding)] と呼ぶ (Dreyfus 1991) 。
- (18) アナス 2019、第8、9章

17

19 本稿では、ドレイファスの技能論の中に一種の知的な要素を見出すことができると主張してきた。 彼の非概念主義的な考えと対立するかもしれない。 は技能にもある種の知的さは必要であり、 ている。この基盤を構成するのが、技能にかかわる知覚と行為である。したがって、本稿の技能に知的な要素を見出す解釈は ン・マクダウェルとの概念主義論争において、非概念主義を掲げ、 したがってドレイファスの非概念主義に一部修正が必要ではないかという展望を持っ 概念主義論争について検討することは、 人間と動物には共通の非概念主義的基盤が存在すると主張し 本稿の議論の範囲を逸脱する。筆者 しかしドレイファスは、

参考文献

- Annas, Julia. 1992, "Ancient Ethics and Modern Morality," in *Philosophical Perspectives*, vol. 6, pp. 119–136
- アナス・ジュリア、2019『徳は知なり――幸福に生きるための倫理学』相澤康隆訳、春秋社

Technology, 16: 3 pp. 208-230.

- Coeckelbergh, Mark. 2012, "Technology as Skill and Activity: Revisiting the Problem of Alienation," in Techne: Research in Philosophy and
- Coeckelbergh, Mark. 2016, "Responsibility and the Moral Phenomenology of Using Self-Driving Cars," in Applied Artificial Intelligence, 30: 8, pp
- Coeckelbergh, Mark. 2019, "Skillful Coping with and through Technologies, Some Challenges and Avenues for a Dreyfus-Inspired Philosophy of Technology," in AI and Society, 34, pp. 269–287
- Dreyfus, Hubert L. and Dreyfus, Stuart E. 1990, "What is Morality?: A Phenomenological Account of the Development of Ethical Expertise," in David Rasmussen (eds.), Universalism vs. Communitarianism: Contemporary Debates in Ethics, MIT Press [ロコードード・ドレイ 本経済評論社『普遍主義対共同体主義』、369-411頁』 フュス、スチュアート・ドレイフュス、1990「道徳性とは何か ―― 倫理的熟達の発展に関する現象学的説明」菊池理夫ほか訳、日
- Dreyfus, Hubert L. 1991, Being-in-the-World A Commentary on Heidegger's Being and Time, Division I, MIT Press [ヒューバート・ドレイファ ス、2000『世界内存在 —— 『存在と時間』における日常性の解釈学 —— 』門脇俊介監訳、産業図書
- Dreyfus, Hubert L. 2001, "The Primacy of Phenomenology over Logical Analysis" in Mark A. Wrathall (eds.), Skilful Coping Essays on the Phenomenology of Everyday Perception and Action, Oxford University Press, 2014, pp. 146–167
- Dreyfus, Hubert L. 2005, "Overcoming the Myth of the Mental; How Philosophers Can Profit from the Phenomenology of Everyday Expertise,"

in Skillful Coping: Essays on the phenomenology of everyday perception and action, Oxford University Press, 2014, pp. 104–124. [ਪ ਸ – 🌣 – ト・ドレイファス、2008「心的作用の神話の克服 ——哲学者が日常的な熟達者的知識の現象学からどのように恩恵を受け得るか

——」蟹池陽一訳『思想』No. 1011、岩波書店、34 – 79頁]

Dreyfus, Hubert L. 2007, "The Return of the Myth of the Mental," in *Inquiry*, vol.50, no. 4, pp. 352-365

Dreyfus, Hubert L. 2013, "The Myth of the Pervasiveness of the Mental," in Joseph K. Schear (eds.), Mind, Reason, and Being-in-the-World: The McDowell-Dreyfus Debate, Routledge, pp. 15-40.

McDowell, John. 1998, "Virtue and Reason," in Mind, Value and Reality, Harvard University Press [ジョン・マクダウェル、2016「徳と理

性」荻原理訳(『徳と理性 ――マクダウェル倫理学論文集』大庭健監訳、

勁草書房)1-42頁]

Stichter, Matt. 2007, "Ethical Expertise: The Skill Model of Virtue," in Ethical Theory and Moral Practice, vol. 10, no. 2, pp. 183-194

(九州大学大学院・博士後期課程